

---

# トンネル

矢口まゆか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トンネル

### 【Nコード】

N3657A

### 【作者名】

矢口まゆか

### 【あらすじ】

高校二年、初夏。奈緒の心の病は、加速をはじめ。理由なく襲う喪失感、空虚感、焦燥感。幸せなはずなのに、どうしてこんなに苦しいんだらう。今の奈緒には、光りは見えない。自己の体験をベースに、うつ病の心理（兆候から発病、闘病）を描こうと思いません。拙い文章ですが、一人でも、何か感じて頂くことができれば幸いです。

## 第1話\*パネル

大きなパネルに映された部屋が、恍々と光を放っている。

「ここでいいか。な。」

私の返事も待たずに、男は304と表示された下の、赤いボタンを押した。

同時に、放たれていた光りが消える。

なるほどね、空いてる部屋だけ明かりがついてるのか。

初めて目にしたシステムに感心しながらも、私はできるだけ平然を装って男の後について歩く。

私の背丈ほどもあるパネル上には、光を放っていた部屋は三つしかなかった。

それを思うと、なんだか、どうにもやるせない。

私の腕時計の針は、午前11時を過ぎた頃を指していた。

“団地妻”という言葉が、脳内をよぎる。

“女子高生” “エロオヤジ” 脳内では低レベルな連想ゲームが展開されている。

男がエレベーターに乗り込んだので、私も後に続く。

「わ、狭っ。」

二人で丁度のスペースに驚き、思わず声を漏らした。

「ん？ああ、そうだな。」

話し掛けたわけではなかったが、男は親切に軽い相槌を打つ。

そっか、このエレベーターは、あえて二人乗りなんだ。

少し気まずさをおぼえ、右斜め前の男をちらっと盗み見る。

清潔感のある黒髪で、細身の長身。

歳は30代前半くらいかな？

端正な顔立ちで、スマートにカチツとスーツを着こなしているその姿は、エリートっぽい空気を纏っている。

あ、指輪だ…。

男の左薬指のそれは、結婚指輪ではないだろうか。

私の軀に、再び、脱力感が呼び戻される。

この人、仕事は？

ココデ、ナニシテルノ？

その問いは、この男へのものだったのか、それとも、自分自身への  
？

## 第2話\*シャワー

浴室からシャワーの音が聞こえてきた。

私はひきつづく脱力感に従い、ベットに腰をおろす。

ひとつ、深いため息をつく。

本当はベットに身体を投げ出したかったけど、それはしなかった。

ぼうつと、部屋を見渡す。

入口で見た巨大パネルに驚いた私は、妖しいライトの中で回るベッ

トの出現などをひそかに予測していたが、全くもつて的外れだった。

室内はこざつぱりしている。

白とベージュを基調にし、落ち着いた着きのある内装で、思ったよりずっと清潔な印象を受けた。

洗面所に備えられた豊富なアメニティに、テレビに、小形の冷蔵庫。観光地で泊まるようなホテルとあまり違いはない。

けれど、薄暗い。

光りが遮断されたこの室内は、異様な感じがする。

時間の感覚が、失われてしまう。

ふと、夏に友達と行ったペンションの夜を思い出し、まさに今、その旅行中であるかのような錯覚に襲われた。

私はこの仲良し3人組の中で、最も“純”なポジションに位置していた。

残りの2人は好奇心旺盛でパワフルなお色ツコであるから、一緒にいるとこの私が随分と清纯な娘に見える。

「やっぱ、若いうちじゃん？遊べるのは。今のうちに色んな男と付き合ってみて、見る目を養うことこそ、未来の自分の幸せのために必要なこと！そう思わない？！」

ベットの上で枕を激しく叩きながら、熱弁を振るう塔子。先程このペンションの廊下で、自称W大の男達に部屋に誘われた。

彼氏がいるにも関わらず、誘いに乗りたいたい彼女は、私を説得しよ

うと必死である。

風呂上がり、息を荒げて語る彼女の姿は、悔しいほどに艶っぽい。「旅先の出会いこそ、旅行の醍醐味だよー。W大だよ、W大！」早紀もはしゃいで続ける。

天真爛漫という言葉がよく似合う彼女。

こちら、悔しいほどに可愛い。

「言ってること、わかんなくはないけどさあ、塔子も早紀も、彼氏が知ったら泣くよ？」

私が言うと、

「だーいじょうぶ！べつにエッチなコトしないもーん。楽しく大貧民して遊ぶだけ！ね、塔子？」

「そ、別腹だって、別腹！こんなの浮気のうちに入らないっつーの。ほんつと、奈緒はカタすぎ！オクテだしさあ。それに奈緒は彼氏いないんだから別によくない？関係ないじゃん。」

塔子の放つストレートは、今日も私のだ真ん中に鈍く重みを残してゆく。

「てゆーかさ、今日見つければ良くない？！奈緒の彼氏つ。うちらがくつつけてあげるからさー。ね、それ良くない？！ねっ、いい考えじゃない？！」

と、早紀のテンションはさらに上がる。

楽しいことが大好きな彼女の、得意の悪ノリだ。

「2人の彼氏がかわいそうつてもあるけど、何より危ないでしょ？今の時代何があるかわかんないし。なんかあつたら取り返すつかないよ？」

早紀の台詞はサクツとシカトして言う。

「だからさあ、ないってそんなこと。あんたほんと心配すぎー！」塔子のイライラが伝わってくる。

が、ここで怯んだらいけない。

「確かに心配すぎだとは、思う。けど、なんかあってからじゃ遅いじゃん。私は黙って見過ごすなんて、できないよ。だって、二人

のコト、心配だもん。」

私は、二人の良心に訴える手段に入った。

今までの母親を気取った態度とは逆に、弱々しく、やや憂いを帯びた調子で私は言った。

さらに、哀願するように続ける。

「二人には、もっと、自分を大事にして欲しいの。」

これは私が、事あるごとに二人に発する言葉だった。

『基本、イイコちゃん』の私には、お似合いのセリフ。

ノリが悪いわけでもなくて、程々にハメも外して、だけど、基本は真面目。

それが、みんなが知ってる私。

それでは今、白昼堂々、制服姿でラブホテルの一室にいる私は一体何なのだろうか。

名前も知らない、今日会ったばかりの男がシャワーから出てくるのを、こうしてベットに腰かけて待っている。

こんなこと、塔子達を知ったら何て言うだろう。

「奈緒らしくないよ。あんた、どうしちゃったの?!」

きつと、そう言って怒るんだろうな。

過激な事を口走りはするが、本当は純粹で良識ある、賢く可愛い女達。

むしろ、過激派は私のほうだ。

不純で、愚かなのは、この私。

最近の私は、本気ですべてがどうでもよくなる危険性を、感じながら生きている。

だって、ぜんぶ、ばからしい。

めっちゃくちゃに壊れてしまえばいいんだ。

私も、この薄汚い世界も。

己に宿る過激な思想は、大都会の真ん中で、日々順調に育ってゆく。もちろんそれは今、この瞬間も。

自分を大事に？笑える。

今、自分がなぜここにいるのかも、よくわからないのに。脅されて、無理矢理連れて来られた訳じゃないんだ。

“同意の上”というやつ。

じゃあ、何で？

お金が欲しかった？

テレビの横に、精算機らしきものがあるのに気付いた。

あれで料金を払うのか。

誰にも知られずに、セーラー服とスーツの密会は成立する。

当たり前用に、何の支障もなく、日々ヒメゴトは遂行されるのだ。互いの『欲望』のみで成り立つ、卑猥なヒメゴト。

それにしても、あの男には警戒心がないんだろうか。

テーブルの上に無造作に置かれている腕時計は、見覚えのあるブランド品であるし、ソファに放つてあるビジネスバッグからは、まるで獲ってくれと言わんばかりに、やはりブランド物の長財布が顔を覗かせている。

あの男は今までに『隙をみてお金だけ持って逃げる女』に、遭遇したことがないのだろう。

それとも、コトに及ぶ前となると、男の脳は軽くなってしまっただろうか。

今ならまだ、ひきかえせる。

ふと、頭をよぎった。

ゴクリ、と、唾液を飲み込む音が体内に響いたのがわかった。

さっきまでのふやけた軀には、いつのまにか僅かな緊張が宿っている。

始めから、騙すつもり逃げるつもりでついてきた訳ではなかった。

私は、お金が欲しかった訳じゃない。

男の人を知りたかった訳でもない。

好奇心？違つう。



どうでもよかった。

考えるのが、面倒だっただけ。

断わることすら、面倒だっただけ。

ただ、流れのままに。

別に、どうなったって、よかったんだ。

そうだけど、でも。

ぐらつと上半身が重たくなる。

慌てて支えようとした手が、ベッド上に投げ出してあったテレビのリモコンを押し潰した。

「あーあっ!」

甲高い喘ぎ声とともに、画面いっぱい女優の悶える表情が映し出された。

驚いて、目を見張った。

薄暗い室内に突如現れた淫らな映像から、目を、そらすことができない。

今度は白い乳房が映し出され、それを熊みたいな中年男が舐め回している。

以前塔子の家で見たAVの、ひどく下品な女優が、脳裏をよぎった。途端に、憎悪にも似た嫌悪感が私の軀を駆け巡る。

嫌!

瞬間、私は通学鞆をひつつかんで、ドアに向かって駆け出していた。ドアの前に立った時、浴室から聞こえていたシャワーの音が、止んだ。

嫌だ！

あたまがくらくらする

。

半ば涙目でドアに手を掛けた。

が、焦りで足が靴につつかえて、うまく履けない。

やむを得ずすばやく靴を抱えあげ、紺色のハイソックスのまま、勢いよく廊下に飛び出た。

浴室のドアが開く音がわずかに聞こえ、後を追うように部屋の重いドアが閉まる音がした。

その音を背中越しに聞きながら、夢中で駆けた。

### 第3話\*キップ

汗で濡れた首に、髪がべったりと張り付いている。

三月に切った髪は、もう肩の辺りまで伸びていた。

少しだけ明るく染めた髪は、毛先が傷んでる。

電車は空いていた。

よかった、やっと座れる。

一番隅の座席にだらりと座る私の呼吸は、未だ乱れたままである。

つかれた……。

静かな車内では、ガタン、ゴトンと、車体の揺れる音が聞こえるだけだ。

それとは別に、もう一つ聞こえる、音。

耳の裏で聞こえる音は、ドクドクと体中にも響き渡っている。

懸命に働く、心臓の音。

おかげで私の血液は、ハイスピードで全身を駆け巡っている。

ああ、生きてるんだ。

私は、生きている。

今年の五月は、ちょっと違ったんだ。

私は毎年、必ずと言っていいほど『五月病』にかかる。

新しい教室、授業、そして人間関係。

環境の変化が私に与えるプレッシャーは、自分で思うよりも、ずっと、重くのしかかるみたい。

そうして限界を迎えるのが、丁度今の季節。

五月、六月辺りなのだ。

心の疲れは倦怠感となって表に現れ、おまけに頭痛や腹痛、吐き気までもついてくる。

学校に行くのも、人に会うのも億劫だ。

朝も起きられなくて、遅刻が目立つようになり、ついには無断欠席

が敢行される。

けれど、それも長くは続かない。

悪い状態が続くのは十日程だ。

そのうちの二、三日でも休めば、もとの日常生活に戻る事ができる。

いや、戻すことができる、と言ったほうが正しい。

この短い休養により、私の脳が出す命令に、どうにか、やっと、体を従わせることができるようになる。

でも、今年の五月は、ちょっと違ったんだ。

お決まりの遅刻、欠席は二週間以上続いている。

もう六月に入ったのに、どうにも調子が戻せない。

今日も、朝起きられなかった。

それでも二限からは行こうとして、電車にも乗ったんだけど、気付けば学校の駅も通り越し、池袋の駅構内にいるじゃないの。

はて、何故私はここに？これではまるで夢遊病患者である。

人で溢れ返っている駅構内。

ここでは急ぎ足が鉄則だ。

通り過ぎる人みんな、無表情で、真っ直ぐ前だけ見て、とにかく早く歩く。

まあ、当たり前か。

遅刻したら大変なものね。

私はわざわざ山手線に乗り換えてまで、何をしにここに来たんだろう。

息苦しい。

こんなにたくさん人がいるのに、誰も私なんかにも目もふれない。

授業中であるはずの時間に、駅でフラつく女子高生に興味を示すのは、下心丸出しの男達だけ。

前方から一人の男が近づいてくる。

「ね、君サボりだろ？暇ならさ、カラオケでも行かない？」

ほうら、ね。

いつものことだ。

セーラー服の魔力は、ほんとにあなどれない。

私服でいる時なんか滅多に声をかけられない私であるのに、ひとたび制服を身に纏えば、途端に男達の見erる目は変わるのだ。

今日のように、学校に行っているはずの時間帯では、さらに魔力はアップする。

大抵声をかけてくるのは、中年男か若い学生や浪人生である。

普段は面倒だから断るところだが、今日は別について行ってもいいやと思った。

珍しくきちんとしたスーツ姿の男だったし、ちょっと、恰好良かったし。

タバコの煙りが充満するカラオケBOXで、気付けば男の腕が私の細い腰にまわされていた。

綺麗な空気を愛する私は、タバコの煙りが大嫌いだ。

だから換気が不十分なカラオケBOXも苦手。

空気清浄機を、せめて三つは置いて頂きたい。

男は、リリースされたばかりの、最新の歌を歌っている。

少し、ぼうつとしてきた。

歌が終わった。

男の顔が、近づいてくる。

私のぽてっとした唇は、何の抵抗もせずに、男の唇を受け止めた。

舌が入ってきて、やっぱりキモチワルイ、と思う。

それでも、為されるがままでいた。

私の小さな胸に手が伸びてきた時は、さすがに驚いて、男の体を突き放した。

男は何故か少年のようにニツと笑い、

「やっぱりダメか。」

と言うと、私の前で右手の五本の指を立てて見せた。

「……………??？」  
なに？パー？

「これだけ出せば文句ないだろ？五万出すよ。君結構タイプだし。俺、細身の子好きなんだよな。」

後ろからガツンと殴られたような衝撃。

脱力感で、頭から足の先まで、力が抜けたみたいだ。

「何だよ、驚いてるの？キライじゃないだろ？」

キライじゃないって、何が？

あんたのこと？

お金？

セックス？

私、処女なんですけど。

くそオヤジに援交を持ち掛けられたことは何度かあった。だけど、この男は爽やかで、顔も良くて、出来る男風で、モテそう

で。  
私の中では確実に、『援交』なんて言葉とは無縁の男が、今お金と引き換えに私のカラダを求めている。

女子高生の、私のカラダを。

シヨックだった。

悲しかった。

よくわからないけれど、なんだか裏切られた気分になった。

こんなもんなんだ、世の中なんて。

もう、どうでもいい。

私も、どうなったっていい。

しばらく空調の冷風に癒されて、やっと呼吸の乱れが落ち着いたら、あれほど動転していた気持ちも、不思議なほどに落ち着いている。感じるのは、スカートから伸びる白い足の疲労だけ。久しぶりに全力疾走したなあ。

池袋のラブホ街を、脇目も振らずに靴下のまま走っていた自分を想

像してみた。

滑稽だ。

思わず、フツと笑った。

あんなに焦って、ばかみたい。

シャワーから出たばかりの男が追ってくることは、まずなかっただろ。

私は何も盗ってこなかったのだし。

むしろ訳もわからず取り残された男を思うと、気の毒にさえ思えてきた。

それはちよつとお人好しすぎるかな。

ほんのり汗ばんだ掌のなかでは、運賃を間違えて買った切符が、くしゃつとなっていた。

## 第4話\*ホーム

朝の、地下鉄の駅のホームは嫌い。

午前8時、上り方面のホームの混雑は、ピークに達する。

ヨン様でも来日してるんですか？

と言いたくなるほど、地下の構内は人々でひしめき合っている。

ここは成田空港か。

この地域に、次々に建設されるマンションや団地によって膨らむ人口は、さびれたこんな小さな駅に大混雑を招く。

整理員が声を張り上げて何か言っている。

朝からうるさい。

低血圧の私の頭の中は、未だふわついたままだ。電車の到着を知らせるアナウンスが流れた。

この場にいる人々が待ちわびるこの乗り物は、いつも私を憂鬱にさせる。

だって車内は、すでに満員。

はあ……。

停車した電車には、はち切れそうな程に人間が詰め込まれている。

ドア側に乗っている人々は、奥からめいっばいに押されて、歪ませた顔をドアのガラスに張り付けている。

気の毒に、すごい苦しそう。

こんなのはどうやって乗れっていうの？

拷問だ。

プシューッというドアの開く音と同時に、車内からどっと人が流れ出る。

一斉に人々の足早に歩く靴音がホームに響く。

続いて、乗車口の脇で待ち構えていた人々がどっと車内に流れ込む。まさに、押し寄せる波。

この波に乗らずして車内にたどり着くのは、不可能と断言している。



成り振り構っている場合ではない。

バーゲン会場やスーパールのタイムセールにて勇姿を奮うオバサマの如く、全力で、それこそ体当たりで、波に飛び込まなければ駄目だ。発車の合図の音が響く。

押し出され、車内に収まり切らない人がいる場所には、駅員や整理員が駆け付けてぎゅうぎゅう押し込む。

もはや乗客は人間とみなされてはいない。

なんとか扉は閉まり、車掌の声が響いた。

破裂しそうな電車は、その身を重そうに揺らし、この駅を去ってゆく。

そう、去っていった。

登校時刻に間に合う最後の電車は、去っていった。

私はといえば、その場に立ちすくみ、人ごたのように一部始終を傍観していた。

遅刻、決定。

電車に乗ろうとしてはホームの椅子から立ち上がるのだが、立ち上がった後のその先に、体が動かなくなってしまう。

こうして、もう、4本も電車を見送った。

決して人だかりに臆したからではない。

入学当初はなかなか乗れずに苦労したが、電車通学ももう二年目、すっかり慣れた。

だからこそ、車内にはさらなる憂鬱が待ち受けていることも、よくわかっている。

やせっぽちの私はこれでもかというほどに押し潰され、窒息寸前、あわや骨折という事態。

通学靴につけていたマスコットなどは、何度行方不明になったことか。

こんな状況でも、無理矢理に小説や漫画を読もうとする人に至っては、理解不能だ。

故意的な嫌がらせとしか思えない。

もちろん、痴漢なんてのは当たり前。  
もう嫌。

たまらなく嫌。  
堪えられない。

満員電車なんてこの世から消えてしまえ。

とは言え、もっと早起きして、ピークを避けて乗車すれば、あっさり問題は解決する。

それは、わかってるんだけど…。

起きられないんだからしょうがない。

だったら、我慢するより他はない。

わかってはいるんだけど…。

再び、電車到着のアナウンスが流れ、今度は下り方面の電車が来た。

私はおもむろに後ろを振り返る。

この駅はホームが一つしかない。

振り返ればすぐ、反対方面の電車に乗ることが出来る。

ホームの真ん中を境に、そこにあつたのは、静寂。

上り方面とは全く对象的に、乗客も、電車を待つ人も少ない。

混雑も、ざわめきも、慌ただしさも無い。

時は、穏やかに流れている。

私は引き寄せられるかのように、電車に乗った。

下り方面の、千葉行き電車で。

## 第5話\*トンネル

走り出した電車が鳴く。ゴウンとした唸り声はトンネル内で反響し、私の耳を突抜けて脳を揺さぶっている。

突如、その声がプツツと止んだ。

と同時に、強烈な光が目飛び込んでくる。

空間が歪む。

感じる、違和感。

でも、悪くない違和感。別世界に放り出されたような何とも言い難い感覚が、ほんの一瞬、ふわっと全身を包み込む。

すべての車窓から一斉に光が射し込み、窓の外には、闇に代わって唐突に景色が現れる。

青くぬける空と木々、そして無数の建築物。

トンネル内に籠っていた音は分散されて、カタン、コトンと、控えめな音に変わった。

やっぱりいいなあ、と思う。

この瞬間が好き。

電車がトンネルを抜けて、地下から地上に出る、この瞬間。

体中に浴びた光が、錯覚を誘う。

まるで、永い眠りから目覚めたみたいな。

生まれ変わったようで、なんとなく感じる爽快感。

卵の殻を破るヒヨコの気持ちって、きつとこんなカンジなんだろう。

うん、このカンジが、いい。

私の駅を境に、この地下鉄は地上に出る。

余韻に浸りながら、延々と続く団地の群れを眺めていた。違う。

これは違う。

私、今、何してるの？

ああ、またやってしまった…。

先程の駅のホームの様子が、僅かに残る爽快感をスウツと連れ去っていく。

か弱い中学生、あれはたしか名門私立の制服だった、を平然と押しつけて、我先にと車内に乗り込む中年サラリーマン。  
どうなの？

大の男として、というか、人間として。

何も感じないんだろうか。

なんだか、淋しい。

満員電車には、大人社会が凝縮されているようだ。

みんな、自分の事だけ。自分しか見えてない。

他人なんかどうでもいいんだ。

何か見えても、見ないふり。

私の中の厭世観は、日々膨らむばかりだ。

なんかもう、どうでもよくない？

学校とか、意味あるの？面倒なだけじゃない？

そんな悪魔の囁きが、私の身体を支配してゆく。

せつかく、今日は間に合う時間に駅に着いたのに。

なのに私は、この電車に乗って逃げてきた。

腹立たしいほどに、弱い。

私の心、私の意志。

私の脳が出す正しい命令は、簡単に悪魔にはねつけられてしまう。

どうやら私の心と身体は、決別をはかったようだ。

これじゃあ私、もう、どうにもできないよ。

トンネルを抜けた時の爽快感は、もはや完全に消え去っていた。

電車は駅に停まる度に、数人の乗客を降ろしてゆく。

下り方面だから、乗車してくる人は少ない。

浦安駅に停車した時、若い母親に手を引かれて、4、5才の子供が  
電車を降りていった。

その小さな後ろ姿に目を向ける。

途端に、顔が熱くなるのがわかった。

私はまるで、子どもと同じだ。

恥ずかしい。

ドアが閉まり、電車はまた走り出した。

自分が情けない。

みんな、嫌でもなんでもちゃんとやっってるじゃないか。

みんなだっつきつと、気付いてる。

きつと、感じてる。

目の前で、眩しいくらいに明るく輝いていた太陽が、うんと遠ざかっっていくのを。

ずっとずっと遠く、豆粒みたいになるまで。

長いトンネルの奥に見える、小さな点みだけに。

そして、背が伸びるにつれて知る。

現実を、社会を、何より己の力量を。

だけど、なんか違うなって思いながらも、みんな納得して受け入れて、日々を過ごしている。

遠い日の夢も、信じていた可能性も離れたふりをして、上手に生きてる。小さくなっていく光の代わりに、そんな『生きる術』を身につけていくから。

あらがうことは出来ない、逃げることは出来ない。

そんなことは意味がない。

希望を見出だせない社会でも、自分達は背負わなくてはならない。

その事実を、変えることはできないから。

だからみんな、ちゃんと理解して生きている。

それが、たぶん『大人』ってこと。

それじゃあ、大人になりきれない私はどうしたらいい？

この先、輝きのない未来の中で、平凡にこじんまり生きていくのも嫌だ。

かと言って、夢や希望なんてモノもない。

どっちにも転べないで逃げてるだけの、私。

逃げる先には何も無いのに。

どうしようもないわからずやだ。

一体、どうしちゃったんだろう。

いつでもなんでも、器用にやってきたはずなのに。

いつの間にか、生きるのが随分と下手になってしまったみたいだ。

電車は、穏やかな日和の中を走る。

やわらかな陽射しと、数人の乗客と、私を乗せて。

私は、何をしてるんだろう。

何がしたいんだろう。

わからない。

空は、あまりに広く、青い。

そして雲は、あまりに白い。

理由もなく、小さな胸は切なさでいっぱいになる。

どうして？

どうしてこんなに苦しいの？

涙が頬を、つたつた。

カタン、コトンと車体が揺れる度に、一粒、また一粒とこぼれ落ち

ては、制服のスカートにシミをつけてゆく。

身体に力はなかった。

涙を隠すことも、拭うことも出来なかった。

乗客の顔は目に入らなかった。

ただそのままに、涙が滑り落ちていくのを感じながら、遠く青い空を見ていた。

## 第6話\*ホームレス

轟音が脳を揺さぶり、空と大地が消える。

ハツとした頬は、乾いた涙でつつぱっている。

電車は再びトンネルに入った。

いつの間にか、いくつも駅を通過していた。

景色をぼうつと見つめて何かを考えていた様だけど、何を考えていたのかさっぱり思い出せない。

朝目覚めた時に、さっきまで確かに見ていたはずの夢が思い出せない、そんなカンジだ。

だけど、心地は良かった。

通り過ぎる無機質な景色が、徐々に山や木に変わっていくのを目にしていたから。

気持ちも、徐々に穏やかになっていくのを感じていた。都心から遠ざかるにつれて、乗客も減っていたようだ。

車内はすっかりがらんとしていた。

電車が走り出す。

視線の先、窓の外に一瞬にして広がる、漆黒。

闇は、果てなく広がっている。

光が遮断されただけなのに、もうここは地球上のどこでもない気がした。

時間の流れも止まっている。

今、私は宇宙空間を駆け抜けているんだ。

光の速さで走る、この銀河鉄道で。

そこにあるはずの無数の星は見えない。

見えるのは、無限の、夜の闇。

誰もいない。

何も聞こえない。

たった独りで流れる星みたいに、銀河を旅する。

青空も、緑の木々も、太陽さえも忘れて。  
誰も知らない、未だ見ぬ星へ。

『実録！ホストにハマる女たち』

窓からふと逸らした視線の先に飛び込んできたのは、週刊誌の中吊り広告だった。

黒地に黄色で太く印刷されたその文字は、私を瞬時に現実世界に引き戻す。

派手色をふんだんに取り入れた中吊りは、車内を都会色にしている。

『リフォーム、オレオレ、忍び寄る詐欺の手口』 『急増！サラリーマンを襲ううつ病』

…さらに都会色を濃くするような見出し。

大人になって、いいことなんてあるんだろうか。

すべてが無駄なことに思えてしょうがない。

虚しさが、すつと横切る。

あの日を思い出していた。

一週間前、ラブホから逃げ出してきたあの日の、夜。

私は驚くほどの平常心で家族と食卓を囲んでいた。

里芋の煮物を箸でつついていると、母が朝の遅刻を咎める。

「あんた最近だらしないわよ。昨日も今日も遅刻して。」

「寝坊したんだもん、しょうがないよ。それにほら、昨日は雨だったし。」

「何言ってるのよ！昨日は急げば間に合う時間だったでしょう？それなのにのろのろ支度して、だから遅刻したんでしょうが！」

「はいはい、わかりましたよ、明日からは気をつけますよ。」

「全く冗談じゃない！雨だからなんて、甘えるのもいい加減にしないさい！遊びじゃないんだよ学校は！」

「…明日はちゃんと行くよ。」

実は遅刻どころか無断欠席、果ては援交未遂だなんて、口が裂けて



も言えない。

いや、もしかしたら昼の出来事は疲れた私の妄想だったのかもしれない。今の私は、あまりに自然ないつもの奈緒だもの。

けれど、自室に戻った私の鼻についた香りは、現実を物語っていた。壁に掛かったセーラー服が放つ、大嫌いなタバコの香り。

あの日から母は毎朝私を起こすようになった。

会社勤めの母は、普段は私を起こさないし、たまに起こしても起こすだけ起こしてすぐに寝てしまう。

それなのにここ一週間、毎朝私が出るまで起きていて、監視している。

遅刻をさせまいと必死なようだ。

でも、家を出た後の娘の行動までは、疑ってないみたい。

母を裏切つてまで、学校に行かない私は何がしたいんだろう。

考えたところで、答えなんてみつからない。

確かなのは、今はとにかく学校に行かなくてはならない、ということ。

引き返さなきゃ。

停車して開いたドアの向こうで、上り電車がこつちを見てる。

鈍色の車体を見つめ返す私の身体は、手摺りにもたれたままだ。

早くあの電車に乗らないと。

でも、身体はピクリとも動かない。

これは、気怠いなんてもんじゃない。

倦怠感が頭から足の先までガチガチに絡み付いて、動けない。

無情にもドアは閉まり、電車はまた走り出す。

今日こそは、なんとかこれを乗り越えないと。

ちよつと頑張ればいいだけなんだ。

つらいのは今だけ。

行くまでがつらいだけなんだから。

何のことはない。

学校に行ってしまったえば、いつもの私でいることができる。  
ずうっと、笑顔でいられる。

体が自動的に演じてくれるから。  
全然問題ない。

だけど、どうしてだろう？

帰りの電車の窓ガラスには、別人みたいな疲れた私の顔が映るんだ。  
そうして大抵、その顔をする時の私は、一日をどんなふうに乗り越  
えたのか全然覚えてない。

あんなに笑って、あんなにはしゃいで。

でも、何だっけ？

何が楽しかったんだっけ？

冷たい氷に触れて、背筋がぞくつとする。

欺いているんだ。

気力を振り絞った自分の笑顔に、ぞつとする。

欺いている。

周りを、自分を。

罪悪感で、胸がイタイ。

もうすぐ終点だ。

終点まで行ったら、今度こそ引き返そう。

さびれた駅前の小さな公園には、太陽に温められた空気がじつとり  
と溜まっていた。

ここ数日雨が続けていたから、湿気が多いんだろう。

ゆらゆらした空気の中に、塵気楼みたいに浮かび上がる小さなお城。  
最近出来た公園の遊具はまだピカピカで、太陽の光でいつそう輝い  
て見える。

すべり台付きのそのお城には、誰もいなかった。

朝ここを通った時は、子連れが何組かいたなあ。

駅の時計に目をやる。

もう1時か…。

終着駅のホームのベンチでぼうつとしていたら、そのまま寝てしまった。

これじゃまるで朝方の酔っ払いだ。

引き返した時は、既に学校に行く気は失せていた。

結局、今日もサボりだ。

何の意味もない、虚しいだけのサボり。

どうせならゲーセンなんかで、ワイワイ楽しくサボってみたい。

太陽は、ほぼ真上から私を照らしてる。

梅雨の晴れ間は随分と陽射しが強い。

若い乙女の大敵である紫外線が、肌を射す。

肌の奥で、早くもシミが生成されてる気がして、足早に公園を通り抜けた。

道路を渡り、線路沿いの並木道に入った。

木陰は熱くなった身体を癒してくれる。

駅前から私の家まで伸びる道路と、線路との間に、この並木道はある。

道は細く、木々は覆いかぶさるように生い茂っている。

夜は絶対に一人で通りたくない道だ。

でも、朝や昼のこの道は大好き。

春先は桜がめいっぱい咲き乱れるし、今の時期には深緑とやわらかな木漏れ日を楽しめる。

いつもの木陰にとめておいた自転車にたどり着き、鍵を外した。

風で葉が揺れて、木漏れ日がチカチカと顔を照らす。

自転車に跨がり、ペダルに足をかける。

突然、ガサツと物音がした。

斜め前の植え込みからだ。

人の気配を感じる。

ゆっくり近づいて見ると、確かに人がいた。

ボサツとした白髪まじりの髪に、黒くすすけた顔。  
洋服も汚れてボロボロだ。

ホームレス？

植木の間にはしゃがみ込んで、何かしてるみたいだ。

彼の脇には大きなゴミ袋があり、中に大量の空き缶が入っていた。  
拾っているんだ、空き缶を。

きつとどこかに持って行って、お金に換えてもらおうだろう。

なんだか早くその場を立ち去りたくなって、改めてペダルに足をかけた。

その時。

彼は振り返り、私に気付く。

目が、合う。

息を飲んだ。

鼓動が早くなるのがわかる。

全身から冷や汗が噴きでてくる。

たまらなくなつて、思い切りペダルをこいだ。

スピードはぐんぐん上がる。

彼の目は、死んでなんかいなかった。

むしろ瞳の奥には、生きる意思が宿っていた。

視線が後ろから絡み付いてくるようで、振り切るようにペダルをこいだ。

今の自分が恥ずかしくて、情けなくて。

ホームレスのほづが、よっぽどちゃんと生きている。

『おまえには生きる資格がない。』

家のない彼に、そう言われた気がした。

中途半端に生きる私を嘲るように、彼の瞳がそう言った気がした。

## 第7話\*ヤドカリ

もう二度と、晴れないんだと思った。

あれから雨は何日降り続いたのだろう。

カーテンの隙間から、空に厚く重なる灰色の雲が覗く。

身体も、あの雨雲のように重い。

太陽は見えないけれど、もう起きなくてはならない時間であることはわかる。

頭上の小さな時計からは、耳障りな電子音が鳴り続いていた。

一息に、破壊してしまいたい衝動。

このうるさい時計を？

ううん、ぜんぶだ。

私も、世界も、宇宙も。

ぜんぶ全部、すべてを。

鳴き疲れたのか、もしくは私の念力のおかげか、時計は音を出すのをやめた。

部屋には再び静寂が訪れる。

聞こえるのは雨音だけ。

腕も足も背中も、疲労感に取り付かれていた。

頭痛もひどい。

しかし、昨日激しい運動をしたのかと問われたら、答えはノーだ。

むしろここ数日、ろくに歩いてもいなかった。

考えられる原因は一つ。

身体と同様に重いまぶたを閉じ、昨晚の格闘を思い出した。

ベッドに入って、電気を消して、目を閉じる。

でも、眠れない。

なぜだか気持ち焦ってソワソワする。

うっすらと、全身に汗が滲んでくる。

何度も寝返りをうつうちに、気付けばまた、闇に襲われていた。

得体の知れない『何か』が、私を飲み込もうとする。

どこからこの部屋に入ってきたのか。

それともずっと潜んでいたの？

何？怖い。

来ないでよ。

形のない、大きくてどす黒い『何か』。

怖い。

恐怖が私の身体を支配する。

『何か』が追ってくる。黒い大きな闇となって、迫ってくる。

怖い！

そのまま居たら押し潰されそうで、逃げたくて。

だけど、逃げられない。どうにも出来ない。

『何か』が、何なのか分からないから。

どうしようもなくて、わけがわからなくなって、そして私はまた、

頭から布団を被る。

ベッドの上でうんと小さく纏まって、布団を被る。

布団を貝とするヤドカリになる。

うずくまって『ヤドカリ』になることが、私にできる精一杯の抵抗。

これ以上ないくらい小さく縮こまって、微かな声を絞り出す。

震える声で繰り返すのは、

「タスケテ！」

何度も、何度も。

声を出す度に涙も溢れ出る。

とどまることなく、次から次へと。

体中から湧き出る恐怖と共に。

怖いよ、誰か助けてよ！

震えながら、ぐしゃぐしゃになりながら、ただひたすらに。

お願い、助けて！

迫り来る闇を前に、私はただそうすることしか出来なかった。

しんとした部屋に、再び電子音が響く。  
また目覚まし？

違う、携帯電話だ。

枕元に転げたピンクの携帯が、音を出して着信を告げている。  
誰よ？こんな朝っぱらから。

しばらくそのままにしていたが、止んだと思えばまた鳴り出すので、仕方なく携帯に手を伸ばす。

着信画面に表示された名前を見て仰天した。  
担任だ。

しかも現在の、ではなくて一年の時の担任、小畑<sup>コハタ</sup>先生だ。

鳴り続ける携帯を手に、私は固まっていた。

ちらと時計を見ると、7時半だった。

あれから二度寝してしまっただようだ。

でも、まだ始業時間じゃないのに…なんで？

用件に見当がつかぬまま、覚悟を決めて通話ボタンを押した。

「も、もしもし…」

「おう、お早う奈緒！オレだよ、小畑！」

耳元で暑苦しく響く声。

いかにも体育会系な、ガタイのいい彼の姿が浮かぶ。

ジャージやTシャツが、誰よりも似合う男。

スーツ姿がサマにならないのは言うまでもない。

「コバ…。お早うございます。」

『コバ』とは、彼のニックネームだ。

私を含めほとんどの生徒は、親しみを込めてそう呼んでいた。

あだ名で呼びながらも敬語で話す私は、どこかアンバランスな気もする。

しかし、平気でタメ口をきく程のイマドキの生徒には、なりきれない自分が居た。

「起きてたか？何度も電話したんだぞ？」

「そうだったんですか、すみません、寝てて…」

「寝てたつてお前、今からじゃ遅刻だろうが！」  
しまった。

「…えつと、学校は…行きません。あの、実は」  
「知ってるよ。」

私の言葉を、コバが遮る。

「知ってる。矢野先生から聞いた。だからオレ、今日迎えにきたんだ。」

「…え？迎えにつて…」

この人は何を言っている？

「今お前のマンションの下にいるんだよ。車だから急げば間に合うだろ。一緒に行くぞ、学校！」

呼吸も、まばたきも、しばらく止まっていた気がする。

どういうことだ？

いくらコバが若い熱血教師だからって、アポなしでいきなり

「来た」

はないでしょ。

てゆーか来ないよ！普通は！

コバの家からうちまでは車で30分はかかるはずだ。

朝の貴重な時間を割いてまで来ること？

私を、学校に行かせる為に？

そんなことの為に？

ただちよつと、ほんの数日、休んでるだけなのに。

それだけのことなのに。

私の欠席は、コバにとってそんなに大きなことじゃないはずだ。

「ごめんなさい…行けません。」

やっと開いた口からは、

「行く」

という言葉は出せなかった。

しかし当然ながらそれで彼が引くわけがない。

「何だよ、俺わざわざ来たんだぞ？それでも行かないのか？」



そう、先生がわざわざ来てくれている、私の為にも。  
でも。

「…無理なんです。」  
私も引かなかった。

理由があつて行きたくないわけじゃない。  
むしろこの体が動いてくれるなら、今すぐ行きたい。  
コバの行動を無駄にしたくない。

「なんでだよ奈緒、頑張れよ！頑張つて出てこいよ！」  
「行けないです、どうしても無理です。」

コバは引かなかった。

私は彼の気持ちに伝えたい思いとは逆に、かたくなに拒み続けた。  
なぜ？なぜ行けない？

気付けば、涙が流れていた。

コバのキモチが、純粹に生徒を想うキモチが、有無を言わず私の  
中に入り込んでくる。

うわべだけじゃなくて、心から心配してくれているのがわかる。  
でも、だから、余計につらくなる。

「なあ奈緒、頑張れよ！」

コバ、ごめん。

頑張りたいけど、頑張れないの。

キモチに伝えたいけど、伝えられないの。

だからお願い、もう放っておいて。

これ以上、期待しないで。

「ごめ…なさ…。」

しゃくり上げながら、私は謝るだけだった。

嗚咽は激しくなるばかりで、もう言葉にならなかった。

「…わかった。」

ついに諦めてコバは言った。

力無く放った言葉には、一瞬、落胆の色がみえた。

「でも、早く出てこいよ。待ってるからな。」

次にそう言った彼の、声の調子はすでに変わっていた。

優しく穏やかで、それでいて力強い声。

しかし私は間違いなく、彼の希望を打ち砕いてしまった。

傷つけてしまった。

電話を切った後、私は後悔の波に溺れて、身動きがとれなくなっていた。

「わかった。」と言った時の、電波によって運ばれたコバの淋しさばかりが、いつまでも耳元で響いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3657a/>

---

トンネル

2011年1月12日15時21分発行